

穢を厭はざりしものなる故なりといへり。文政七年五月吾が舊藩にて異種徒の者共穿鑿に付き、藤内頭仁藏・三右衛門よりの言上書に如左記載せり。

藤内
隱坊
加籠屋

右藤内与申は、身分之本名に御座候。隱坊与申候は、町家等之死去人を葬候時之名目に御座候。但し藤内に不佞、惣而死人を葬候者を隱坊与申候由。加籠屋与申は、御武士家・町方等に御吉事有之、御祝に罷出候砌、并五節句等嘉日に勸進方仕候砌は、加籠屋与相唱候事。

按ずるに、右三名一種の者にて、藤内は其の祖先の名ならんか。隱坊の稱は、雍州府志に、倭俗崇僧多謂御坊。古僧徒臨其場。或火葬或土葬。自修之。今嫌其事。雖出其場。引導調經畢後、令守場者修之。自茲謂此人同稱御坊。といへる如く、もと火葬場掛りの出家に代りて、茶毗の事をなしけるに依りて、出家と同じく御坊と稱せしを、後に隱坊と書きて、異種徒の一種藤内の一名とはなしたるも

の也。故に火葬場に限りたる名目とはいへり。又加籠屋と呼べる名目は、如何なる由縁にて呼びそめたるか、未だ詳かならず。備中の國人小寺清之が老牛餘喘に、屠兒・穢多の事を論註して、此者は六國史・類聚國史などに、俘囚また夷俘とある者にて、昔蝦夷人の皇國に仇せしを征してとらへしを、諸國に分ち置かれたる者どもの末なり。茶筌といふ者も同類にて、穢多よりわかれたる者なり。此者どもは空也僧の教をききて、屠兒のわざを止めて死したる人を埋めたり。空也僧は亂世の頃にて、戰場の死骸を埋めたりし事ものに見ゆ。また茶筌をうりたり。空也僧をかきたる繪に、茶筌をもてり。皆良民に近づき佛事を助けなどせしが、一種の者となれるなり。良民に近づく故に、穢多よりよく見ゆれども、公にては穢多の下につけ給へり。といへり。右の論説にて考ふれば、吾が金澤にて、従前藤内共をばおんぼうとも、また加籠屋とも呼びたるもの、彼の茶筌と呼べる一種の如く、そのかみ竹籠の細工をなして賣りありきたりし事などよりして呼びそめたる名目の、後々まで遺れる稱號ならんか。

○梅澤町

此の地は淺野新町の繼ぎにて、淺野町口の街尾なり。従前は淺野中嶋村の地内宇梅澤と呼び來れる地にて、皮多共爰に居住しける處、明治四年八月穢多・非人等の稱を廢せられ、一般民籍に編入、身分・職業共都而同一に相成るやうに可取扱旨御達に付き、梅澤町と町名を立て、金澤市中へ屬せられ、淺野新町と共に金澤市中とは成りたり。但し身元能き者共は、追々此の地を退去しける故、今は戸數減少せり。

○皮多之來歴

和名鈔に云ふ。屠兒。楊氏漢語鈔云。屠兒屠兒訓屠兒屠兒和名惠止利。屠牛馬肉取屠雞之義也。殺生及屠牛馬肉取賣者也。と見ゆ、下學集に、穢多是屠兒也、河原者。とあり。和訓栞に云ふ。また穢多と書けり。されどもとは是とりの轉訛なるべし。といへり。屠者を法顯傳に、名爲惡人。與人別居。入城中則擊竹自異。人則避之。とあれば、我が邦の風俗も相似たり。人の舍内に入れば、人と俱に食せず。同火せず。席を並べず。住居以谷以野。故に谷者野者とい

ふ。或は夙者といふ。畿内夙村多し。皆穢多住す。穢多の稱もまた當れり。もと佛制に据るなるべし。穢多を長吏といふは、張里の誤り也といふべし。薩摩にて人外と呼び、越後にてぶんじといひ、長岡にてじなこといふ。張里は馬醫の名、穢多衆之をもて呼べりとぞ。又雍州府志に、東三條南有天部村、此處與悲田寺爲一雙云々。共號穢多。元刺取牛馬皮。故稱穢多。因稱穢多。或號皮太。とあり。三州志來因概覽にも、今世穢多といふ者は、屠者の唱へ誤なり。倭名抄に屠者をエトリと訓す。是鷹の餌を取る義と云ふ。今平安三條橋東の屠者の居所をアマヘと云ふ。是即ち古管郷の餘戸なるべし。能登・越中の古管郷名に餘戸あるも、古へ蝦夷の餘種の屠者なる者を、此の所に分ち置きたるなるべし。只我が能・越にも限らず、諸國の餘戸へも分ち住せしむると見えて、國史に民夷と並べ載するもの往々見ゆ。民とは我が王民也。夷とは蝦夷なり。此の夷種今猶穢民として我が王民と齒別せしめず。其の名戸籍外に在りて、先づは其の宅を街尾の棄地に置き、其の穢多の種を別つ者也。といへり。平次按ずるに、右穢多・屠者の論説はさる